

## ■ 特集「対話」

# ひとときの対話

あれほど対話し続けたいくなる関係は、どうして創られたのだろうか？

中尾陽子  
(南山大学経営学部)

## 1. はじめに

今回の特集テーマが『対話』であると知ったとき、筆者の頭には、今年の3月卒業していったゼミメンバー達の顔が浮かんできた。筆者の所属する学部では、基本的に3年次生からの2年間一つのゼミに所属し、その教員が専門とする領域について学んでいく。筆者のゼミは、ラボラトリー方式の体験学習を通して人間関係づくりやコミュニケーションを学ぶ、経営学部では少し変わったゼミだと捉えられている。そんなゼミに集まった2020年4月入学生15名（以下、2020生と略記する）は、筆者がこれまで体験したことがない程にメンバー同士の対話を好み、とても豊かな学習ジャーナルやレポートを記述する人達だった。ただ、彼らがゼミの開始当初から対話好きであり豊かなジャーナル記述をしていたかという、決してそうではなかったとも感じる。そのため、ゼミに所属してから2年間の関わりの時を過ごしながら、彼らは大きく変化・成長していったと考えられる。

彼らに起きていたこのポジティブな変化・成長のプロセスを捉えておくことは、筆者の今後のゼミ活動にとって有効だけでなく、ラボラトリー方式の体験学習の実践に関する有効な視点を捉えることにつながるのではないかと考え、本稿に取り組むこととした。

## 2. 目的と方法

本研究では、2020生達の大学生活における特徴、そして彼らとの2022年4月から2年間のゼミ活動について、以下の2つの側面から検討していく。

1) 研究対象者である2020生達が入学してすぐに経験したコロナ禍での大学生活、また、その後の2年間のゼミ活動をふりかえり、どのような学びの時を過ごしてきたのかについて概観する。

2) 研究対象者達が、課外活動を含めたゼミのプログラムと、そこで出会ったメンバーとの関わりを通して、どのような体験をし、どのような気づきや学びが生まれていたのかについて検討する。特に、メンバー同士の積極的な対話と、

豊かなジャーナル記述へつながっていった要因について考察する。

これらの検討は2020年度から2023年度の授業記録、ゼミの課外活動の記録、2020生の記述したジャーナルおよびレポートの内容に基づいて実施した。本研究を通して、2020生達がラボラトリー方式の体験学習を通して創り出した関係や学びの様相についてふりかえり、彼らの取り組みから得られる知見を今後の実践につなげていきたい。

### 3. 2020生の大学生活

2020年4月に大学へ入学した学生達は、本学の学生に限らず、新型コロナウイルスの影響を大きく受けながら大学生活をスタートした学年だったと言えるだろう。世界各国で未知のウイルスに対する厳しい対応がとられていたこの時期、日本においても、2020年3月、全国の小中高等学校等に対して一斉臨時休校が要請された。幸い大学は春休み期間であり、その時点で授業への影響は生じなかったものの、その後も新型コロナウイルスの感染状況は改善されず、本学においても4月からの授業は完全オンラインで実施されることが決まった。このオンラインでの授業体制は2020年度前期一杯続き、9月中旬に始まる後期は、ほんの一部の演習系の授業でわずかに対面授業が実施されたものの、前期とほぼ同様の状況が続いた。そのため2020生は、一年間ほぼ登校する機会を得られないままとなり、大学での人間関係も、閉ざされたまま過ごすことを余儀なくされていたと言える。苦しい受験勉強をようやく乗り越え、大学での新しい生活や出会いに夢を膨らませていた学生達にとって、このような日々はどれほど悲しく辛い体験だったことだろうか。

翌年の2021年度に入ると、ゼミなど少人数の演習科目の授業は全面的に対面実施となったものの、その際の授業運営はコロナ禍前と全く異なるものであった。当時はまだ感染拡大を防ぐための対策として、3密回避やソーシャルディスタンスを保つことが強く叫ばれていた時期であった。そのため、大学の基本的な対応方針として、ディスカッションの際にはお互いが向かい合うことのないような座席配置にすること、互いの距離を2メートル以上とること、マスクの常時着用、着席位置をできるだけ固定し限られたメンバーとの交流に留めることなどが示されていた。これは、できるだけ多様なメンバーと、生の関わりを通して学ぶことを大切にするラボラトリー方式の体験学習の実践にとって、絶望的な気持ちになるような状況であった。しかしながら、オンラインでの体験学習を余儀なくされていた2020年度に比べれば、随分ありがたい状況になったことも事実であり、前向きに捉えることもできた。数少ない対面授業が、参加者達にとって少しでも学びへの意欲を高める時間になることを願い、できる限りの感染対策を施しながら、体験を通した学びの場づくりに取り組んでいたことを思い出す。

なお、2021年度の授業は、密を避けるために、講義科目に関しても『教室定員の2分の1までの人数で授業を実施する』という方針で運営されることとなった。本研究の対象学生達が所属する経営学部の授業は、大規模な人数で実施されるものが多いため、受講生数に対して適切なサイズの教室を準備できない事態も生じていた。そのような授業の場合は、受講生を半分に割り、隔回でオンラインと対面参加を入れ替えるという授業運営がなされていたのである。大学としても、可能な限りの対策を講じて学びの場を創りあげようとしていた訳ではあるが、この頃になると学生から、「オンライン授業の方が楽でよい」という声が頻繁に聞かれるようになってきた。そのように感じるのはなぜなのかという理由と共に、筆者は大変複雑な思いでそれらの声を聴いていた。

### 3-1. 2020生とのゼミ活動の概要

このように、入学から2年間もオンライン授業を中心とした学生生活を送ってきた2020生達とのゼミ活動は、筆者としても、例年以上に心構えを持ちながら始めた印象がある。ここまでの大学生活で、極端に人との関わりを制限されてきたこの学年。そんな彼らの関わりから、一体どのようなプロセスが生まれるのだろうという関心と同時に、不安があったことも間違いない。2020年度からの2年間、本学では、授業だけでなく課外活動でも様々に厳しい制限が設けられたため、彼らが部活動やサークル活動などの人間関係も希薄な状態にあったことは容易に想像できた。また、大学生の多くが経験するアルバイトも、飲食業を中心に雇用が控えられる状況にあったため、大学外の人と関わる機会も持てずにきた学生が一定程度いるものと推察された。レポートに記述されたあるメンバーの言葉は、その頃の状況や思いを豊かにイメージさせてくれる。

私がこのゼミに入りたいと思ったきっかけは、2年生の時、先輩方が開いてくれたイベントに参加したことです。楽しそうにゼミ活動を行っている先輩方を見て、興味を持ち始めたことを、今でも覚えています。その後、ゼミ選択の説明会に参加したところ、今まで思い描いていたゼミナールではなく、衝撃を受けました。様々な活動を行っていることを知り、「やりたいことはなんでも出来る」という言葉に、大学1年生の頃にコロナウイルスの影響で何も出来なかった不甲斐なさから、新しいことを始めたいと思い、このゼミに応募しました。

3年生は、「挑戦」の年だったと思います。合宿だったり、大学祭への出店だったり、ゼミパーカーを作ることだったり、おもちゃライブラリーだったり、新しいことを始めることが出来ました。大学祭と合宿は私が「やりたい！」と言い出したものなので、実際に行うことが出来て嬉しかったです。やりたいと言ったことに対して、それを現実にしてくれるメンバーがいたからこそ、これだけ新しい活動を行うことが出来たと思っています。

でも、今3年生の頃を思い返すと、本当に未熟で、不甲斐ない面がたくさんありました。メンバーに頼りすぎてしまったり、後先考えずに発言してしまったりと、迷惑をたくさんかけたと思い、反省しています。(最終レポートより)

こうして2022年4月に授業としてのゼミが始まり、2020生15名との本格的な活動がスタートした。筆者のゼミでは例年、正規のゼミが始まる前から、学年を超えたゼミメンバーとの顔合わせイベントや課外活動の機会を設け、ご本人の希望に応じてできるだけ多く体験的な学びの場に参加できるようにしている。2020生は、全員いずれかの機会に参加していたため、授業開始時は、ある程度お互いが知り合っている状態になっていた。とはいえ、メンバー全員が初めて一堂に会した4月の実習では、他者との関わりに戸惑い沈黙しがちなメンバーが3分の1程度、自らテンションをあげ、かなり頑張っただけで関わろうとしている様に思われるメンバーが半分程度という様子であったため、全体としては賑やかで活気があるものの、話したい人が話したいことを口にしていない、一方通行に近いコミュニケーションがあちこちで起きている印象だった。

この2020生達の大きな特徴の一つは、ゼミの課外活動へ積極的に参加するメンバーがとて多かつたことである。当ゼミでは、授業としてのゼミの時間にラボラトリー方式の体験学習の実習体験を通して学び、そこでの気づきを日常で様々な試みながら、学びを広げ深めていくことを大切にしている。この試みは、例えば各自の家族や友人との関わり、また、それぞれが所属する部活動やアルバイトのような身近な場面で意識的に取り組んでみることを励ますと共に、自分たちがやってみようことを考え、主体的に実行していく課外活動も推奨している。また、普段あまり関わりのない人達と関わる機会を提供できればと思い、筆者の方でもいくつかの課外活動の場を準備している。2020生以前から継続的に活動してきたものには、こども食堂の運営サポート、地域のお祭りの運営サポート、本学経営学部のゼミ紹介イベントの企画・運営、ゼミ合宿などがあったが、2020生達は、これらの活動から派生した、あるいは今までやっていなかった活動にも関心を示し、次々と飛び込んでいった。その活動の一つひとつは決して楽なものではなく、時期が重なってひどく大変な思いをしたこともあったが、これらの体験が彼らの関係性に大きな、そして意味ある影響を与えてきたと感じる。

以下には、彼らが行った課外活動の概要、また筆者がその中で起きていたプロセスとして重要だったと考えることを、2020生の記述したジャーナルやレポートの抜粋と共に記していく。なお、学生が記述した内容については、個人名が特定されないよう、また、文脈を損なわない程度に適宜省略しながら、できるだけ原文のまま記載していく。

## こども食堂の運営サポート

課外活動の一つとして、筆者のゼミでは、月1回の頻度で開催される某こども食堂の活動へ参加を続けてきた。2017年から始まったこの活動は、毎年2名から4名の有志が、開催当日の運営サポートや、レクリエーションの企画・運営などに携わらせていただいていた。こども食堂の参加者である地域のこども達やその母親世代、また、ボランティアとして参加する方々など、非常に幅広い世代の人と関わることのできる場であるため、有志メンバーはかなり熱心に参加し、また他のゼミメンバーへも参加を働きかけるものの、協力メンバーはなかなか増えない状況が通例となっていた。この様子を見ながら筆者は、人との関わりを学びたいと思い当ゼミを志望する学生達であっても、興味関心が大きく分かれる活動なのだろうと感じていた。

しかしながら、2020生達は、2022年1月に15名中11名が参加したことを皮切りに、平均すると1回あたり7.4名のメンバーが1年間の活動に参加し続けた。また例年は、就職活動が本格化する時期に参加が途絶え、そのまま4年生の参加はほぼなくなってしまうのだが、2020生は就職活動を終えた頃から再び参加するようになり、卒業までの一年間、平均2.8名のメンバーが参加を続けた。

また、このこども食堂の活動は、新型コロナウイルスの影響で会食の場を設けることが難しくなり、その時々状況に合わせて変化を余儀なくされた（中尾, 2022）。ゼミメンバー達も目まぐるしく変化する状況に併せ、新しいチャレンジをし続けてきたが、2020生達は、ここまでの活動を受け継ぎつつ、以下の2つの新しい試みを実行した。

### a. 運営に関わるメンバーや組織へのインタビュー

会食ができなくなった当こども食堂は、様々な試行錯誤を経て、2020年11月より、手作り弁当を作成し、安価で提供するという活動に取り組み始めた。この取り組みは大好評で、徐々に行列ができる状況となっていった。しかし、単にお弁当を販売するだけでは、会食の時代にはあった参加者同士あるいは参加者とスタッフのつながりが失われてしまいそうなことに気づいた学生達は、2021年5月より、少しでも参加者の方々とのつながりを作りたいという思いを込めたりフレットを作成し、お弁当に添える活動を始めていた。

2020生はこのリーフレット作成活動を引き継ぐにあたり、このこども食堂の活動の中にある人と人とのつながりを知ってもらいたいと考え、活動を支える人や組織を順次紹介する企画を考案した。まずは、この活動を始めたコアメンバー、続いて長く活動に参加しているボランティアの方々、そして継続的に食材をご寄付くださる企業様などにインタビューを行い、この活動に対する思いを聞き取っていった。この方々との対話を通して、学生達は、こども食堂の活動に関わる一人ひとりの中に、それぞれ違う、そして自分たちが想像していなかったような思いがあることも実感していった。また、聞き取った内容をこども

も達にもわかるようにと試行錯誤しながら紙面を創り上げた体験は、自分が伝えたい情報や想いを、多様な読み手のことを想像しながら文字で表現することの難しさと重要性を実感する活動となっていたようである。加えて、リーフレット作成を担ったメンバー達は、他の活動にも積極的に取り組んでいたため、幾つもの活動に並行して取り組む中で、他のメンバーと協同して期限内に課題達成する力も養うこととなった。

長い間おかげさま食堂でボランティアをされている皆さんにはどんな想いがあるのかインタビューをさせていただいたとき、ここで友人に会える、話せるから来ているという人が多いことが意外でした。働く人も参加者の方も、誰かと会って話してコミュニケーションを取りたいという人が多く、この食堂はコミュニケーションを作っている場でもあるのだと分かりました。こども食堂という場を通して、色々な年代の方とお話をし、コミュニケーションの考えを広げることができたとても貴重な経験となりました。(最終レポートより)

この2年間のゼミ活動を通して、他のゼミではできない様々な経験をすることができました。今振り返ると本当にたくさんのことを企画、実行してきたなと思います。

これらの活動を通して、この2年間で大きく自分の中で意識が変わった・気づいたことがあります。その一つが、時間の管理という点です。このゼミに入った当初、私は部活をしていたこともあり、月に一回行われるこども食堂にだけ参加したらいいという気持ちを持っていました。その理由としては、先にも説明したように部活があったことと自分の時間を持ってないことが嫌だったからです。学校行って、部活行って、バイトしてという生活だけでも疲れると思っていたのに、これ以上忙しくなるとは困るという考えから、エントリーシートで書いたようなこととは全く違うことを考えていました。また、最初の方の授業でどんな活動をしたかと考えたとき、思っている以上にたくさん意見が出て「そんなにたくさんできるわけない」「そんなにたくさん取り組んでどうするんだ」と思っていました。その当時を振り返ってみると、取り組む人は自分一人だけではないのに、自分で勝手に「大変になる」と想像して否定をしていたり、自分にできる自信がなかったからそんなことを考えていたんだろうと思いました。実際のところ、確かに部活やバイトで忙しい時期やタイミングはあっても、しっかりとスケジュール管理をすれば空き時間はできたはずなのに、面倒くさいと見て見ぬふりをしていました。

しかし、いざ活動が始まると、こども食堂のリーフレット作成に立候補したり、後輩サポートに首を突っ込んでみたりと自分から忙しくしていき

ました。ある時は、期末テストと部活の大会、後輩サポートの基準決め、リーフレットとやらなければいけないことがたくさんあり大変でしたが、「この日は何もしたくないから意地でも今日終わらせる」とか、「明日の夜は時間があるから、リーフレットは明日やろう」という風に自分で時間を作る努力をするようになりました。今までとっていなかったメモを取ってみたり、スケジュール帳に書き込んでスケジュールを可視化することで空き時間を見つけやすくなりました。その影響もあり、就職活動の際にもテキパキとこなせたのではないかなと思います。

これから、社会人になる上でスケジュール管理・時間管理をすることはとても大事になってきます。このゼミでたくさんの課外活動に加わることができたおかげで、自分なりの管理の仕方を見つけ、意識できるようになったと思っています。(最終レポートより)

## b. おもちゃライブラリーのための企画書作成と運営

2022年4月、認定NPO法人 全国こども食堂支援センター・むすびえと東京おもちゃ美術館が協働し、『おもちゃライブラリー』という企画の募集が始まった(認定NPO法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ, 2022a)。その内容は、コロナ禍で心理的に辛い状況が続くこども達に、おもちゃを通じた多様な対話や体験機会を提供することも食堂を募集するというものであった。採択されれば、おもちゃコンサルタントにより選定された世界のグッド・トイのセット(約15万円分)が寄贈されるという内容であったが、そのためには、多項目から成る応募書類の提出および審査、採択された場合は一定期間の実施と報告書の提出などが求められていた。

筆者にとってはやや尻込みしたくなる内容ではあったが、もしかすると学生達が関心を持つかもしれないと思い情報提供したところ、間もなく3名からやってみたいとの声があがった。書類締切まで1ヶ月を切っていた時期のことで、本当に書き上がるかな?と半信半疑ながらも背中を押したところ、文章の荒さは目立つものの、とても熱い思いが記された書類の草稿を書きあげた。「コロナ禍で激減してしまった地域の方々との関わりを増やしたい。」「こどもたちと私たち自身が、共に成長する機会にしたい。」という2つの思いを軸に記述されたその文章には、こども食堂と呼ばれる活動に参加しながらも、参加者の方々と関係を創ることが難しい現状への悔しさ・もどかしさが滲み出ており、なんとかして彼らが人とリアルに関わることが出来る場を創っていきたくて強く感じた。

この熱い思いは幸いにも主催者へ届き、彼らは寄贈されたおもちゃを用いて、おもちゃライブラリーを実施する機会を得ることができた(認定NPO法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ, 2022b)。こども達と一緒に遊ぶ彼らは本当に楽しそうで、その笑顔にまずはホッとする思いだった。また、例えば、

お母さん同士がゆったりとお喋りしている中でこども同士がおもちゃを巡って争うような場面に出会い、戸惑うような場面も度々起きていたが、この場にどのように働きかけるのがよいだろうか…とメンバー同士で考え、実際に恐る恐る試みってみることなどは、彼らの日常ではほぼ起こらない体験だったと思われる。普段は関わらないような方々と実際に、かつ継続的に関わる場を自分達の手で創り出し、共に成長していく可能性を探求していったこのプロセスは、彼らの成長につながるものであったと感じている。

### 地域のお祭り運営のサポート（滝川スタンプラリー）

当ゼミではこれまで、大学に近い地域にあるいりなか商店街発展会の主催イベント等で、運営サポートの機会をいただいていた。ただこの活動も、新型コロナウイルスの影響を大きく受けた活動の一つであった。コロナ禍前のイベントは、近隣の公園や小学校を会場として開催されていたが、イベントが再開された2021年は、人の密集を避けるため、地域の中に会場を点在させるスタンプラリー形式での開催が試みられた。2022年10月には、2021年に続き2回目の滝川スタンプラリーが開催される運びとなり、発展会役員の方から当ゼミへ、ブース出展のお誘いをいただいた。後に記す2つの活動の実施時期と近いこと、また、当ゼミでは経験したことのないイベントで0からの企画・準備が必要であることから、筆者としては一応情報提供程度のもりであったが、間もなく3名の学生から参加希望の意思が示された。驚いて参加したい訳を尋ね、その理由を聴いてみると、何とか彼らの思いを実現できるようサポートしたいと強く感じた。

彼らが希望した1つ目の理由は、まだこのゼミで誰もやっていないことをしてみたいというもの。2つ目の理由は、2021年度から当ゼミメンバーが作成をお手伝いしてきたいりなか教育コンテンツ（いりなか商店街発展会，2021；いりなか商店街発展会，2022）の存在を、近隣住民に知ってもらい絶好の機会だと思うから、というものであった。確かにこのメンバーは、ここまでのゼミの活動の中で、度々この2つに関する問題意識を口にしていたため、その思いを流してしまうよりは、苦難を承知でチャレンジしてみるのがよいだろうと考え、筆者の懸念もわかちあった上で、お互い覚悟を決めた。

そこから始まった企画と準備の過程は、彼らにとって試行錯誤の繰り返しであったこと間違いなし。しかし、机上の空論で終わらせることなく、本番前にゼミ生の協力を得て予行演習をし、そのフィードバックを元に励まし合いながら改善を繰り返した過程は、彼らが望んでいた「誰もやったことのないことを0から創り上げる体験」に他ならなかったであろう。

スタンプラリー当日は朝から雨に見舞われ、来場者があるのだろうかかと心配したが、最終的には準備した景品が全てなくなり、十分な参加者数に到達することができた。一方、雨の影響で急遽対応を変更することになったり、いりな



か教育コンテンツに対する反応はあまり得られなかったことなどから、自分たちの事前の想定や企画はまだまだ十分ではなかったことに気づく体験ともなった。

課外活動を通して、企画・計画をすることの大変さや、協働することの難しさを学ぶことが出来ました。企画をすることで苦労したのは、納得のいく完成形にもっていくためには、何度も作り変えたり、改善したりを繰り返し返さなければいけないことです。世の中にある商品やイベントは、完成された形で私たちに提供されますが、その過程には相当な苦労があるということを実感しました。納得のいくものを完成させるには粘り強く、時には考えてきたものを大きく変えることも必要なことだと学びました。(最終レポートより)

色々な活動をメンバーと企画する中で、このゼミには自分の限界を決めつけたいメンバーがたくさんいたと感じました。反対に私は諦めが早かったり、ここまでやれば十分だろうという基準が低いことに気づきました。滝川でのクイズや、おもちゃライブラリーの初回の準備など、やったことがないけれどその場に来てくれるであろう参加者のことを深く考え、話し合う必要がある場面が何度かありました。滝川は天候にも左右され、思うような結果は得られませんでした。おもちゃライブラリーは初回から参加者に楽しんでもらう事ができたと思います。一人ではメールで予約を取るということは考えなかつただろうし、何パターンもの場合を想定してメンバーを配置するという事もできなかつたと思います。何かを1から企画するときの難しさ、大変さ、そして想像する力の必要性をとでも感じました。やったことがないことを成功させたいのであれば、自分が思っている以上に準備をする必要があること、他のメンバーから粘り強く活動することの大切さを教えてもらいました。(最終レポートより)

#### 後輩サポート活動（経営学部のゼミ紹介イベントの企画運営・新ゼミ生の採用活動）

筆者らの所属する経営学部では、毎年10月から11月の中旬にかけて、2年生が来年度から始まるゼミを決めるための活動を始める。当ゼミでは、経営学部でどのようなゼミが開講されるのか、各ゼミではどのようなことを学ぶのか、などを2年生に知ってもらうための『ゼミ紹介イベント』の企画と運営に携わってきた。学部の教員や他ゼミのメンバーと協働する必要があるイベントであり、ちょっとした情報提供のミスが大混乱につながる可能性もあるため、とても神経を使うが、その分学びも大きい活動だと言える。

また、このイベントが終わるとすぐ、各ゼミが次年度のゼミ生を決めるため

動き始める。この通称『採用活動』は、それぞれのゼミにとって適切な方法により実行していくのだが、当ゼミは毎年、ここまでの自分のゼミでの体験をふりかえり、「どのような人と、このゼミの活動を一緒にやっていきたいか」というところに目を向け、全員でわかちあい、そのような人に関心を持ってもらう方法や、選考の基準と方法なども自分達で考えてもらい、実施している。この新ゼミ生の採用は、やることが膨大にある非常に大変な活動ではあるが、改めて自分のゼミでの学びを見つめ直し、メンバーとの協働を通して深い気づきが生まれる機会となることなどから、筆者としては何とかその困難を乗り越えてくれることを祈りつつ伴走しているものである。2020生の一人は、この時の体験について以下のように記している。

協働することの難しさについては、情報共有の大変さや、分業して作ったものを合わせていく作業の大変さもありましたが、一番難しいのは複数人が同じ熱量で一つのことを成し遂げるといふことだと感じました。「課外活動の中で一番大変だったこと」を挙げるなら、私は後輩サポートだったと思います。でも、大変だったと同時に大きなやりがいを得ることが出来た活動でもあります。自分の人生の中で一生懸命頑張ってきたことはいくつかありますが、すべてが一人で臨むものでした。勉強はもちろん、スポーツも個人で努力をしていくものしか経験してきませんでした。だからこそ、後輩サポートでは自分を含めたメンバー4人で納得いくまでとことん話し合っ、妥協しないということが出来たと思っています。一つの事に向かって複数人でやり遂げられたのは、初めてのことで自分にとってはとても特別な経験だったと感じます。そして何より、楽しくて充実していた時間でした。自分にとっては、結果が良かった悪かっただけではなく、その過程でどんなプロセスがあったかも充実感が決まる要因になるなと思いました。結果がどうであれ、必死に自分たちが出来ることをやり遂げようとしたからこそ、その時間が充実していたと感じるのかなと思います。(最終レポートより)

2022年秋の課外活動は、先述した滝川スタンプラリー、当活動、後述する大学祭への出店に関する活動時期が重なりながら進んでいくこととなった。彼らは、コアの担当者が上手く分散されれば、お互いサポートしながら円滑に進んでいこうと考え、夏休み前にその様な役割分担をしてはいたのだが、それは絵に描いた餅であったことが夏休み明けに明らかになる。ここで起きたプロセスについては、次の大学祭への出店と併せて検討していきたい。

## 大学祭への出店

当ゼミからの大学祭への参加は、2020生が初めてのことであった。元々大学

祭に関しては、大学祭実行委員会から求められる手続きに対応することが非常に大変であるという噂を聞いていたが、コロナ禍で実施要領が更に厳しくなっており、大学祭当日はもちろん、事前の手続きもかなりの質と量が求められた。大学祭へのエントリーは、4月のゼミが始まって間もなく締め切られるため、話がまとまらないのではないかと想像していたが、その筆者の想像はそのままに、大学祭への参加が決まってしまったように見えていた。当日参加できる人はどれだけいるのか、何のお店を出店するのか、そもそも本当にこのことをやりたいと思っている人は誰で何人いるのか、誰が主体となって今後の手続きを進めていくのか、など、この時点で共通理解が必要だと思われることが曖昧なまま、一部メンバーの「やりたい！」という強い声に押され、参加することだけが決まっていったように思われた。この曖昧な決定プロセスの影響はその後も続き、準備や当日の運営で一部メンバーに負担の偏りが生じたり、目標が見失われたまま時間に追われてとにかく動くというような場面が生じていた。また当日も、様々に不満につながるような出来事が起き、それらも影響した情報共有の曖昧さが、一時的に出店停止となるトラブルにもつながってしまったようであった。

後輩サポート活動、そして大学祭出店に関わるプロセスは、結果としてメンバー同士の信頼感に大きな差が生まれるきっかけとなったように感じる。大学祭に関する話し合いが始まった2022年4月から11月までの約7ヶ月間の体験から、彼らの中に、自分たちの関わりの中で起きている問題に気づいたり、不満を感じる人が複数いたことは間違いない。しかしながら、その気づきや思いは自分の中に留められたり、一部のメンバーとの間のみで伝え合われており、全体でわかちあうことや、懸念の解消に向けて行動することは難しい状態だったようである。

新ゼミ生を決定するための活動が一段落した時期と、大学祭が終わった時期はほぼ同じであったため、筆者としては、ここで一旦それぞれの気づきやお互いへの懸念を言語化し、できる限り伝え合うことが大切であろうと考えた。ゼミの時間を使って全員でのわかちあいの時を持ったところ、一人ひとりが、控え目ながらも自分の思いを率直に伝えていったため、同じ出来事を体験していても、人によってこれだけ観方や感じ方に違いが生まれていたのだということが明らかになっていった。この日のジャーナルはいつもに増して記述量が多くて深く、改めて、これら2つの活動への取り組みがメンバー一人ひとりに与えていた影響の大きさを、メンバー達も筆者も実感することとなった。

話し合いを聞いていて、後輩サポートに関して反省する面がたくさんありました。取り組んでいた時の記憶や、今回の話し合いや数人の今回のジャーナルを見て、この活動が全員に嫌な思いをさせたしまった活動になっていたと感じました。元々のコアメンバーは、仕事を取られたという

思いや、面接の採点方法を作ってもらっていたにもかかわらず修正を加えてしまったことで、間違いなく活動の意欲をそいでしまい、悲しい思いを抱かせてしまいました。直接的には関与していなかったメンバーにも、疎外感や申し訳なさを抱かせてしまっていたことも知ることができました。これらの原因は、情報共有を怠ったことと、みんなの気持ちを考えていない行動を取ってしまったことに気づく事が出来なかったことだと思います。

情報共有に関しては、例えば変更を加えたときに、何時間もかけて決まった結論に至るまでのプロセスを記述することはとても大変で、時間が限られていてやることも多い中で、そこまで手を回してられませんでしたが、でも、その結果辛い思いをさせてしまったので、自分の満足のいくまで突き詰める事よりも、情報を共有する事に一番に労力をかけるべきだったと深く反省しています。また、勝手な思い込みもあったからだと思います。後輩サポートの活動をしていて、自分達との責任感の差が顕著に見られる行動を取られてしまうことがしばしばありました。なので、申し訳ないのですが、自分達以外の人はみんなそんなに意欲的ではないのかなと、安易な考えで決めつけてしまい、情報共有を必要とされているなどと考えもしていませんでした。話し合いを通してみんなが意欲的に参加しようとしてくれていたことを知って、素直にうれしかったし、申し訳ない気持ちになりました。どうしたらみんなの気持ちに気がつく事が出来たかを考えてみると、仕事を分担することも一つの手段だったのかなと思います。(中略)

情報共有にしても、仕事の分担にしても、大切なことはコミュニケーションだったなと感じました。自分はみんなの行動をどう思っていて、みんなは私の行動をどう思っているかの共有をしなかったから、今反省や後悔が生まれていると思います。思いを共有する事が人間関係や信頼関係を良好にする手段だと思いました。なので、ここから、後輩サポートや学祭を通してメンバー一人一人に感じた思いを共有することに力を入れようと思います。これらの行事を通して、メンバーの良い所を本当に多く知ることができました。逆にネガティブな思いを持ってしまったこともありました。思うことは簡単でも実際に相手に伝えるということは非常に難しいことだと普段も感じていますが、この思いを自分にしまいこんでしまうのではなく、言葉を選びながら上手く伝える方法を探して、挑戦だと思って伝えようと思います。

後輩サポートを通して学ぶ事はたくさんありましたが、中尾ゼミに入ろうと決めたポイントのひとつである、「人間関係を作る力を高める」を身にしみて体験し、学ぶ事ができる貴重な機会でした。今回得た学びは後輩サポートのメンバーとして活動することでしか得ることができなかったので、この活動に取り組む事が出来て本当に良かったと思います。

今回の活動ではコアメンバーと一緒に辛い思いもたくさんしましたが、最初から最後まで一緒に頑張ることができて本当に良かったです。途中で弱音を口にしてている姿を何度も見ていますが、最後までやり抜いた二人は本当に素晴らしいと思います。(2022年度Q3のジャーナルより)

今回の実習のお題は、夏休み前から始まった後輩サポートと学祭出店の活動を通して気づいた『中尾ゼミ10期生の強み・弱み』を話し合うものでした。実は、私は今回の授業に参加するにあたって、気持ちがとても憂鬱でした。なぜかという、後輩サポートに関しては、中途半端にしか協力できなかった申し訳なさと、学際に関しては、サークルの活動などで全く活動に関われず気まずさを感じていたためです。夏休み前に「後輩サポート」のコアメンバーとして頑張ろうと思ったものの、時間がない中でToDoリストを作成できなかつたり、先を見通すことが出来ずスケジュール調整ができなかつたりしたために、周りに協力を要請しなければ成り立たない活動にもかかわらず、夏休みが明けてからも、これといって具体的な行動指針を立てることができませんでした。

結局、その状況を心配してくれたメンバー達がシステムを再構築して、私たちはそこで分担された部門に依頼された仕事を処理するような形態になりました。二人は他の活動で忙しいと分かっているながらも、その活動を通して培った、計画力と実行力に頼らざるをえなかった自分を反省しています。夏休み中に先輩に後輩サポートの活動の話聞いておくなり、ゼミ選考のスケジュールを把握しておくなどすれば、ここまで二人に仕事が集中することにはならなかったと思います。

また、準備を進めていく中で、全体を把握しているメンバーでできるだけ仕事をこなしていく方が意見や仕事がまとまるのが早いという雰囲気生まれ、他のメンバーには、人手が必要だったり、割り振ればやってもらえそうな仕事をお願いするだけになってしまい、10期生中尾ゼミの目標である「みんなが等しく頑張る」を意識できなくなっていました。この状況を今振り返ってみれば、コアメンバー以外の子に疎外感を与えてしまったり、気まずさや申し訳なさを感じさせてしまったりする上に、自分たちも仕事を多く抱え込んで切羽詰まってしまったので、もっと仲間に頼ればよかったなと思いました。

私は、主に中尾ゼミ説明会と面接方法立案の主メンバーとして活動していましたが、自分がつくったパワーポイントや面接方法・採点基準の形が知らない間に変化していることがあり、そこで「自分がつくった意味があったのかな」という気持ちが生まれ、活動に参加する意欲が下がってしまったことは事実としてあります。しかし、そこでなんで変更したのかを聞かずにコミュニケーションを疎かにしたり、「完成形の方が優れているからこ

こで自分が何か言うより黙っていた方が平穩にスムーズに進む」と何も言わなかった自分が良くなかったなと思います。

そういう状況の中、AさんとBさんはどんなにタスクが多くても、より良い説明会・面接にするために1限からゼミ室に集まって、自分の時間を割いてでも、計画・実行・修正を繰り返し常に向上心をもってくれました。しかし私は、すぐ妥協して「これくらいで何とかなる」と思ったりするタイプなので、その熱量についていけない部分がでてきました。これは完全に意識の差だったと思います。そんな中で、サークル活動が忙しくなり、面接のすり合わせやエントリーシートを選ぶ取り組みに全く関わることができないまま、ゼミ選考における後輩サポートの活動が終わってしまいました。そんな状況の中での実習だったため、結局自分の反省しか頭に浮かばず、雰囲気も重く、強み・弱みに関してもっと深掘りできたと感じています。

今後の活動も、やる気・熱量の差から、最終的な完成形の求めるレベルの差やそこに到達するまでに自分がかけてもいいとおもう労力の差がメンバーによって違ってくると思います。その中で、いかにメンバーを巻き込んで「みんなが等しく頑張る」雰囲気づくりをし、モチベーションを維持していくことの重要性を今回学んだので、もっと情報共有をして、メンバーを信じて頼ったり、自分自身も平穩を求めて同調ばかりするのではなく、時にはぶつかり合ったりすることで、自分と仲間の成長につなげていきたいと考えています。(2022年度Q3のジャーナルより)

二年間をふりかえり、このゼミは自分自身について知るだけでなく、価値観が違う者同士が集まるなかでお互いをどのように尊重していくのかを常に考えさせてくれるゼミであったと感じます。多くの活動をする中で気づいたことは、相手を頼る大切さです。これは、多くの活動を通して強く感じましたが、大学祭の準備は特にその大切さを知りました。準備の始めあたり、周りのメンバーは自分よりも頑張っていることを知っていたため、頼ることなく一人で進めようと安易に考えていました。しかし、途中から「どうして大学祭はみんなで作るものなのに一人で頑張っているんだろう。」と考えるようになり、途中でやめたくなつた覚えがあります。Cさんに相談したところ、「まわりに手伝ってほしいことを伝えるべきだよ。」と言われ、伝えてみたところ、多くのメンバーが準備を進めてくれました。その時に自分は どうして早く周りに伝えなかったんだろうと考えたのですが、おそらく自分の計画が遅れてしまったことから、自分のミスは自分で取り返そうと変に考えていたのだと気づきました。こんな場合、人に頼ってしまうことで相手に嫌な感情を抱かせてしまうのではないかと...と思うことが人生ではよくあると思うのですが、相手からお願いや頼み事、期待を

されて嫌な気持ちになる人は、もしかしたらあまりいないのではないかと感じるようになりました。少なくともこのゼミのメンバーにはいなかったからだと思います。

とはいえ、自分が相手に助けを求めるばかりでは、相手もつらい思いををすると思うので、自分も相手の頼み事や期待に応えたいと思う人間になっていきたいです。そして、もっと期待される人間にもなりたいです。(最終レポートより)

## 自主合宿

コロナ禍前、当ゼミでは、毎年夏休みに2学年合同のゼミ合宿を行っていた。1泊2日あるいは2泊3日の日程の中で、ゼミの時間では実施が難しいような実習に取り組んだり、就職活動を終えた4年生が3年生のために自分達が就職活動で実際に体験したグループワークを実践したり、様々なレクリエーションを楽しんだり、学年を超えた豊かな時間を過ごしていた。しかし、新型コロナウイルスの影響で、2020年度から宿泊を伴う行事は禁止され、2022年度の夏もまだ大学として実施が認められていない状況だった。しかし社会全体としては、2020年からの2年間で様々な対応策も蓄積されてきたため、十分な対策を施すことで一定の安全を担保する可能性はあるとも考えられた。合宿実施に強い希望を持っていた数名のメンバーは、有志での自主合宿を企画。メンバーに呼びかけたところ、結果として13名が参加し、実施されることとなった。全て自分達で企画・運営した非常に盛り沢山のプログラムとその関わりを通して、普段の授業では知ることのできないお互いを知ることにつながったようだった。

この合宿体験の中に、彼らが対話的な関係を産み出していく一つのきっかけがあったように思う。合宿の企画にあたり、ラボラトリー方式の体験学習の実習も実施したいと相談を受け、紹介した実習の一つが『ひとときの対話』であった。実習『ひとときの対話』とは、Creative O. D. vol.3 (柳原, 2003) そして、その後刊行された Creative Human Relations II (津村・星野, 1996) に、実習『出会いの試み』というタイトルで掲載されている実習と同様のものである。これらの実習は、2人1組になり、小冊子に書かれた質問項目に沿って対話を進めていくという内容なのだが、『出会いの試み』と『ひとときの対話』の小冊子冒頭にある説明書きを比較すると、『ひとときの対話』の方がより簡潔な内容になっていることがわかる。そのため、原典である実習『出会いの試み』が、学生にとってより取り組みやすいものになるようアレンジされたものが『ひとときの対話』なのではないかと考えられる。筆者が前任校でこの実習に初めて出会った時、小冊子の表紙に『ひとときの対話』と記されていたため、ずっとこちらが正式な実習タイトルだと思い込んでいたが、今回改めて確認してみて気づいた次第である。

合宿で用いた小冊子の質問項目は、大学生になる前の自分について、大学生

活の中で体験していることや思い、相手に対する印象などに関する内容であり、出来事として話すようなものから、深い自己開示にもつながるようなものまで、比較的幅広い項目が盛り込まれていた。合宿におけるこの実習の体験は、2020生の多くのメンバーの心にポジティブな体験として残ったようであった。合宿から帰ってきた彼らに感想を尋ねたところ、実習『ひとときの対話』での気づきを伝えてくれるメンバーが何人もおり、またこの実習をやりたいとリクエストされたことが印象に残っている。最終レポートにあった以下の記述からは、合宿での実習体験が、その後のメンバーとの関わりに影響を及ぼし、つながっていった様子が伝わってくる。

3年生の実習で一番記憶に残っていることは、合宿で行ったひとときの対話です。正直この実習があるまで、ペアになったDさんとはほとんど会話をしたことが無くどんな子なのか全然知らなかったのですが、この実習を行って、Dさんについて新しい発見があり、この時から仲良くなるのが出来たと思っています。その後4年生になってからの一年は、「成長」の年だったと思います。就活や3年生とのゼミ活動を通して、自分について考えさせられる年でした。だからこそ、授業の対話の時間では3年生の時より深い話が出来るようになったと思います。私は今まで自分のことを人に話すことが得意ではなく、あまり本音を話すことはなかったです。しかし、3年生の時に自分について理解し、伝え方も分かるようになったからこそ、自分のことをみんなにより知ってもらえることが出来たと思っているし、私もみんなのことを3年生の時よりも知ることが出来たと思います。

対話をすることによって、自分と違う価値観に驚いたり、そういう考えもあるんだ、と発見がありました。3年生の時よりも対話の時間がすごく充実し、楽しみとなっていました。そして、最後の実習「四面鏡」で、3年生の時よりも自分についてみんなに知ってもらえて、みんなのことを知ることが出来たことを実感しました。1年前とは異なった項目を選んでくれる人もいたし、同じ項目を選んでもくれた人もいましたが、その理由について、1年前よりも「たしかに」と思いながら聞くことが出来ました。それだけ私のことを知ってくれたということも嬉しかったし、自分のことをみんなにさらけ出すことができたということも、成長を感じて嬉しかったです。(最終レポートより)

### 3-2. 実習『ひとときの対話』体験 その後

自主合宿における実習『ひとときの対話』の体験は、多くのメンバーの心に大きな印象を残したようで、このゼミの終盤に実施したプログラム作りの実習において、3グループ中2グループが実習『ひとときの対話』をアレンジした内容を実施することとなった。



筆者のゼミでは、近年、4年生の秋学期後半からの時間を使い、自分たちで1回分のゼミのプログラムを考え、メンバーへ提供し、学び合うことを続けている。卒業が近づくこの時期に、このような時を設けるねらいの一つは、彼らがここまで取り組んできたラボラトリー方式の体験学習への理解をより深め、ファシリテーターとしてメンバーやグループのプロセスに働きかける力を養う機会をもつことである。また、もう一つのねらいであり筆者の願いとして、ここまで共に学んできたゼミメンバーとの関わりをふりかえり、一人ひとりとの関わり残しがないよう卒業して行ってほしい、という思いがある。3年生秋の課外活動を通して信頼関係に偏りが生じ、卒業研究のためのグループ決めやその後のグループ活動を通して、それぞれの正直な気持ちに触れるのが怖いほどの関係も生まれていた2020生達が、どのように今の自分の思いを伝え合い、どのようなプログラムを実施するのか、正直なところ不安も感じながら様子を見守っていた。

結果として、プログラム作りの実習は、表1に示すようなねらいとスケジュールで実施された。初回にメンバーそれぞれの今の思いややってみたいことを全体でわかちあった結果、大きく3つの関心があることがわかり、3グループでプログラム作りをしていくこととなった。そこからグループで話し合い、より具体的な企画・準備を進めていったのだが、各グループのねらいと内容の重なり具合を確認するため、次の授業の冒頭で全体シェアを行ったところ、3グループのうち2つが、実習としては『ひとときの対話』を実施したいと思っていることがわかった。筆者のこれまでの経験では、プログラムで似ている点があるとわかった時点で、違うねらいや実習を検討し始める場合がほとんどだったが、2020生達は全く迷う様子なく、「ねらいが違うし、実習で使う質問項目を工夫するから構わない」と言い、他のプログラムに変えようとする様子は見られなかった。確かに、ねらいが異なっていれば違う学びのプロセスを体験できる可能性はあるし、何より、どうしてもこの実習をやりたいのだという強い意思が感じられたため、その思いを尊重しようと考えた。

そして結局彼らは、念のため予備日としていた日にもこの実習をやりたいと言い、Cグループが2回分のゼミを運営する形で、ゼミとしては3回連続で実習『ひとときの対話』に取り組んだ。筆者も、参加者の一人として全てのプログラムに参加したのだが、全く飽きる様子も手を抜く様子もなく、心から楽しそうに、熱心に対話を続ける彼らの様子を垣間見ながら、自分が心配していたような関係はどこにもなかったのだろうかと思ったり、なぜ彼らはこれほど対話をし続けたいのだろうかと考えながら、同じ時を過ごしていた。このことについては、後の節で考察していきたい。

表1. 実習 体験学習プログラムを設計しよう！ 2023年度の概要

<p>このプロジェクトのねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① ラボラトリー方式の体験学習について理解を深める。</li> <li>② 体験から学ぶ場をつくり、実施していくファシリテーションの基礎的な力を養う。</li> <li>③ プログラムづくりの際に起こるプロセスから学ぶ。</li> </ul>
<p>全体スケジュールと各回の実施内容</p> <p>10/3： 自分の思いの明確化・ゼミメンバーの思いを知る          チームのメンバーと出会う・思いや願いの共有          学びのテーマの選択          参加者の理解</p> <p>10/10： 暫定のねらいづくり          プログラムの計画・立案</p> <p>10/17： プログラムの計画・立案・準備          ねらいの確定</p> <p>10/24-11/28： グループによる実習実施 &amp; 参加者からのFB</p>
<p style="text-align: center;"><b>10/24 グループA</b></p> <p>テーマ： 小6の3学期を思い出そう！</p> <p>ねらい：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 全員で同じレクに取り組むことで純粋な子ども心を思い出す。</li> <li>② 今と昔の心境の違いを理解する。</li> </ul>
<p style="text-align: center;"><b>10/31 グループB</b></p> <p>テーマ： 一対一でひとときの対話</p> <p>ねらい： 役割の固定化（話し手・きき手）をなくし、その人の素と本質を知る</p>
<p style="text-align: center;"><b>11/21 &amp; 28 グループC</b></p> <p>テーマ： 3人でひとときの対話</p> <p>ねらい：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対話する相手のことを深く知る</li> <li>・自分の視野を広げて、多様性を受け入れる準備をする</li> </ul>

なお、表2は、プログラムづくりの実習において、実習『ひとときの対話』を実施したメンバー達が考えた質問項目を一覧にしたものである。2グループのメンバーが考えた項目に重なりがあったため、筆者が項目を整理し、内容が近いと考えられるもの同士をグループ化した。自分自身に関する項目が大半を占めているが、筆者もこの時の実習にメンバーとして参加し、そう簡単には答えることができない質問項目が大半だという感覚を持った。自分にじっくり目を向けながら言葉にする中で、相手から問いかけられることも度々起き、1つの質問項目で30分程対話をし続けてしまう内容もあった。彼らのおかげでとても豊かな対話の時間を過ごすことができたため、これらの内容は、ぜひ今後の実習でも活用していきたいと考えている。

表2. 実習『ひとときの対話』 質問項目

<p>その人自身について</p> <p>自分から見た自分</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 高校時代はどんな人だった？</li> <li>● 自分の好きなところは？</li> <li>● 自分の直したいところは？</li> </ul>
<p>他者との関わりの中での自分</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 恋人、好きな人の前ではどんな自分？</li> <li>● 友達といるときはどのようなポジションが多い？</li> <li>● 相手と意見が合わない時どうする？</li> <li>● 他の人に隠していること（レベルは自分たちで決めてね！二人の秘密ね♡）</li> </ul>
<p>他者から見た自分</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 親友、仲良い友だちから言われる性格は？</li> <li>● 家族から言われる自分の性格</li> </ul>
<p>日常の自分</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 最近爆笑したこと</li> <li>● 最近行った旅行、遊び</li> <li>● 最近泣いたこと</li> <li>● 暇なとき何してる？</li> <li>● 家ではどんな感じ？</li> <li>● 素になれるのはどんなとき？</li> </ul>
<p>行動や思考の傾向</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分にとって幸せな瞬間は？</li> <li>● 計画的？のんびり？</li> <li>● 諦めは早い方か？</li> <li>● 苦手なタイプは？</li> <li>● いくらでもお金をかけていいと思えるもの</li> <li>● 未来のことを想像する？それとも今を楽しむ？</li> <li>● 突然遊びに誘われたい？事前？前日？</li> </ul>
<p>未来・未体験のことについての思い</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分の理想像は？将来どんな人間になりたい？</li> <li>● 自分の将来設計は？</li> <li>● 結婚したい？するなら何歳？</li> <li>● 子どもはほしい？ほしいなら何人？</li> <li>● 明日地球が減びるなら何をする？</li> <li>● 宝くじ当たったらどうする？（貯金以外）</li> </ul>
<p>他者に対する気持ちや考え</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 1番仲のいい人はどんな人？なんで仲良い？その人の性格や好きなところは？</li> <li>● 恋人に求める1番重要なことは？</li> <li>● 親友や仲良い人ってどんな人？</li> <li>● 恋人ってどんな人？（今、過去）</li> <li>● 尊敬できる人はどんな人？</li> <li>● 苦手な人ってどんな人？</li> <li>● 異性の好きなポイント</li> <li>● 異性の苦手なポイント</li> </ul>
<p>ゼミのメンバーについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ゼミメンバーの誰になってみたい？</li> <li>● 自分以外のゼミメンバーのいいところは？</li> <li>● 相手の今の印象は？</li> <li>● ここまで話して変わった印象、変わっていない印象</li> </ul>

この表は、2020生による3回の実習で用いられた質問項目について、重複した内容をまとめた上で、筆者がその内容に沿ってリスト化したものである。

#### 4. 考察 ～あれほど対話し続けたい関係は、どうして創られたのだろうか？～

ここまで2020生達との活動をふりかえてみると、本稿には取り上げ切れなかったことがまだいくつもあり、とにかく活動的な2年間を過ごしてきたと感じる。例年以上に課外活動へ積極的であったことについては、彼らの中に大きく、「大学生らしいことをしたい」と「人と交流したい」という2つの思いがあったと考えられる。「大学生らしいことをしたい」という思いは、例えば合宿の開催や大学祭への出店につながっていき、「人と交流したい」という思いは、おもちゃライブラリーや滝川スタンプラリーという地域の方々と関わる機会を創出したり、こども食堂の活動に関わる方々の思いをうかがいリーフレットにして発信する活動へとつながっていった。どの活動も、コロナ禍であることも相俟って、実行するためには膨大な検討と工夫が必要になっていたが、それでも彼らは「やりたい」というシンプルな思いに突き動かされ、一つひとつやり遂げていったことに改めて驚いている。そして、苦難を顧みることなく多くのことに挑戦したからこそ、それぞれの活動の中で必ず人との関わりが生まれ、その中でもとりわけ関わるが必要になるゼミメンバーとの間には、深い喜びも、様々な葛藤も生まれた様子が見えてきた。

こうしてふりかえてみると、彼らの関係は、やはり始めから対話的であった訳ではないと感じる。それどころか、3年生秋から4年生夏の約1年間は、どのメンバーとでも気楽に話すことができるような関係性ではなく、筆者は、いくつもの決裂が生まれてしまうことを覚悟していたようにも思う。そのような関係性であったにも関わらず、彼らはそれぞれが、それぞれのタイミングで関わりを創る上での大切なポイントに気づき、その気づきを踏まえて試み、どれだけでも対話を続けたいような関係へ変化・成長していったと感じる。

このような関係は、どのようにして作られていったのだろうか。この過程をふりかえてみると、何か一つのきっかけからこのような関係が生まれた訳ではなく、いくつもの小さな積み重ねが影響し合っていたと考えられる。彼らのレポートとジャーナルに記述された言葉に注目し、それらを紡ぎながら、対話的な関係づくりにポジティブな影響を与えたことについて考察していきたい。

なお、引用するレポートとジャーナルの記述内容は、必ずしも筆者の考察に重なり合うと感じられない部分があるかもしれない。しかしながら、記述内容を抜粋しすぎることは、彼らの言葉に込められた思いの全体性を損なってしまうようにも感じたため、できるだけ彼らの思いが伝わるように紹介していきたいと思う。

##### 4-1. ジャーナルを通した自己分析と自己開示

このメンバー達の対話的な関係づくりにポジティブな影響を与えたきっかけの一つとして、ジャーナルの記述を通した対話があったと考えられた。2年間

のゼミでは、毎回の授業後に、その日の体験や気づきをジャーナルに記述し提出することを求めていた。また、コロナ禍以降のジャーナル提出は、大学により整備された学習支援システムを利用していたため、提出された記述をお互いに閲覧できるよう設定することもできた。筆者としては、このような機能を活用すれば、他のメンバーの記述したジャーナルを通して、ゼミの中で起きていたプロセスへの気づきを広げることができるのではないかと考え、メンバーのジャーナルを読み合うことと共に、お互いコメントを記入し合い、その気づきを更に広げあうことも推奨してきた。ただ、もしメンバーに閲覧されたくないが筆者には読んで欲しい場合もあるかも知れないと思い、筆者個人宛のメール機能を使った提出もできるようにしていた。また、各自のジャーナルに対しては、それぞれの気づきが更に広がり深まることを願って、筆者もコメントを書いてきた。

2020生は、例年に比べて、このジャーナルの記述を丁寧にし続けてくれたことが大きな特徴であったと感じる。例年、ラボラトリー方式の体験学習の一連の学び中で、このジャーナルは、何をどのように書けばよいのかと戸惑い、特に始めの頃は簡潔な感想で記述を終わらせる人が多いプログラムである。また、自分の気持ちや考えに目を向けることや、その言語化が苦手な人を中心に、ジャーナルの記述は面倒なものとして敬遠されていく傾向があるのも事実である。しかし2020生は、初回から比較的長い記述をする学生が複数おり、自己分析を中心とした2000文字を超えるジャーナルを提出する人もいたため、このような丁寧な記述に多くのメンバーが影響を受けたと感じている。ジャーナルの相互閲覧を通して丁寧な記述に触れ、影響され、彼ら一人ひとりのジャーナルの記述は徐々に深まっていった。これらのジャーナルを読んでいると、ゼミを終えた後のひととき、それぞれが自分自身と対話する時間を持ち、丁寧にその気づきを記述してくれている様子が日を追うごとに伝わってくるようになった。このような営みを2年間続けたことによって、彼らは少しずつ、確実に自己理解を深めていったのであろう。

また、これらのジャーナルには、ゼミの時間を終えて再びじっくりとふりかえった内容が記述されているため、ゼミ内のわかちあいでは伝え合われなかったそれぞれの気持ちや考えも知る機会にもなっていた。このことは、メンバー一人ひとりのより深い自己開示に触れる機会となっていたことだろう。更にこれらのジャーナルには、それぞれの率直な気持ちも多く記されており、3年生の秋以降は、徐々に辛さ苦しさが記されることも増えてきた。しかし、一般的には表出をためらうような気持ちが、非常に深刻とまでは思われないう程度で書き方で記述されていることが大半であったため、ジャーナルを読んだ他のメンバーは、その人のことを少し意識しながら次のゼミや課外活動の中で関わり、というプロセスが生まれていたとも感じる。このような、「この人のことをサポートしなくては！」「この人たちの関係を何とかしなければ！」というほど

の気がかりを抱えることなく、それでも、それぞれの思いを意識しながら関わり続ける場があったことは、彼らにとって安心安全が担保された、程よい強度のトレーニングとなっていたと考えられる。このトレーニングの積み重ねによって、徐々にお互いの深い思いに関心を向け、受け止め合える関係が創られていったのではないだろうか。

このように、2年間脈々と続けられたジャーナルを通した自己分析と自己開示は、自分を、そしてお互いをより深く知り、理解することへ着実につながっていったものと考えられる。

私が一番成長したなと感じる部分は、物事や自分の経験・感情を人に分かりやすく説明できるようになってきたところです。このゼミを通して、私にとって自分の気持ちを言語化することがかなり負荷のかかることだと気づきました。「なんでそう思うの?」と聞かれると「なんとなく」とか「感覚でそう思うから」という返事をしたくなることを抑えて、自分の気持ちを見つめ直すことが大変でした。私は自分が思っているよりも、「自分がどう感じているのか」を考える作業をサボっていることに気づきました。これは、私の場の平和を求めすぎる性格が関係していると思いました。例えば私には、誰かに心無い言葉を言われても、言葉の真意について考えないようにしたり、その言葉を言われて自分がどう思うかを考えないようにし、無言や愛想笑いなどでその場をやり過ごして、自分がストレスを感じないように対処する節があります。そのため、相手と本心からぶつかることを避けて、自分の気持ちを言語化することが苦手になって、いつのまにか自分で自分がどう思っているか分からない状態になることが増えていきました。その結果、課題に対処するにも、周りの意見を得てからの土台がないと自分の意見が生み出せなくなり、相手の意見を肯定するばかりで思考を放棄するという癖もついてしまいました。

そんな自分がこのゼミに入って、実習体験や、日々のジャーナルや、卒論のグループワークを通して、嫌でも自分の気持ちを見つめ直して、言語化して、相手に伝えるトレーニングをしたことで、「自分がどう感じているのか」に気づき、「それをどうわかりやすく相手に伝えるか」努力するようになっていきました。毎回ゼミが終わると疲労感がすごくて、なんでこんなに疲れているのか分かっていなかったけれど、このレポートを書きながら、自分はちゃんと負荷のかかる人間関係トレーニングをできていたんだなと気づきました。(最終レポートより)

2年間のゼミの授業を通して、人と向き合う機会が非常に多かったので、自己理解や他己理解が深まったと実感しています。自己理解に関して具体的に挙げるとすれば、自分の性格や考え方が明確になりました。私はこれ

まで他人から捉えられているであろう自分の性格や考え方に矛盾がないように振る舞うことを意識していました。例えば、「良く喋る明るい人間」と思われていると感じたら、どんな場面でも自分から話題を振ろうとしたり、「初対面の人と話すのが得意」だと思われていたら、誰よりも先に話しかけに行くことを心掛けたりしていました。「喋るのが大好きなんだよね」とか「人見知りしないんだよね」とか本来の自分とはどこか違うと感じていても、声に出して発信することで、自分さえも信じ込ませて、こうでありたいという理想像や人から思われているであろう人間を作り上げてきた気がします。だからこそ、それが無理していたという感覚が全くなかったのも、これまで気づかなかったのですが、2年間の授業を通して気づけた気がします。(中略)

また、人の良いところが目につくようになりました。これまでは、素敵だなあと感じても、深く考えたりはせずに、流してしまうことがほとんどでしたが、ゼミの活動の中では、素敵だなと感じたら、それを吐き出せるジャーナルという場があったので、より鮮明に頭で整理しながら、書き留めることができました。こうしたら自分に取り入れられそうとか、こう意識を変えていこうかなとか考えながら過ごせたので、人の良いところをただ憧れるだけでなく自分に取り入れられるように努力できたように思います。

人それぞれの良さを知ったからこそ、「自分は自分、人は人、みんな違ってみんな良い」と考えられるようにもなりました。普段私は自分のマイナスな部分に意識が向きがちだったので、心配性を直して楽観的になりたいとか、優柔不断を直して強い意志を持ちたいとか、思っていたのですが、自分が欠点と感じている点も他の人から見たら利点になるかもしれないし、たとえ自分が楽観的な性格になったり、強い意志を持った人間になれたとしたら、逆に今度は心配性や優柔不断の良さに憧れるような気もするので、ないものねだりだなと感じました。対になる性格にはそれぞれ利点と欠点両方持ち合わせていると思うので、全て理想的な人間になることはできないと気づけました。

2年間でのジャーナルでは反省や今後の課題を述べることが多くあったように思いますが、ただ反省するだけでなく、ちゃんと自分の良さも沢山見つけることができていました。自分の良さを知った上で、現状に満足せず上を目指せるように意識してジャーナルを書くようにしていました。自分を多少は甘やかしつつもやっぱり厳しく生きていくのが、しっくりくるのでこのスタンスは変えずにこれからも頑張っていこうと思っています。(最終レポートより)

## 4-2. 小さな自己開示と受容

ジャーナルを通した自己開示と共に、ゼミの時間に取り組んだ実習の中では、小さな自己開示と受容のプロセスが繰り返されてきたと感じる。これは、普段一緒にいる友達同士の関係では生まれにくいような、違いから気づき、学ぶ体験となり、対話が生まれ続けることにつながっていたと考えられる。この小さな自己開示と受容の繰り返しは、メンバー達に、お互いの違いや他者からのフィードバックを通して『自分らしさ』を知るという体験、そして、どのような自分であっても受け入れてもらえることを実感する、という体験をもたらしてくれたと考えられる。

### 4-2-1. お互いの違いやフィードバックを通して気づく『自分らしさ』

ゼミの活動を始めた頃の彼らは、「同じ大学生ならば、だいたいこんな感じだろう」と、自分の普通を基準にしながら、お互いのことをわかったつもりになっている所があるように感じていた。その一方で、他者との違いを恐れ、あまり自分の気持ちや考えを表すことなく過ごすメンバーもいたようだった。しかし、実習を通して普段は話さないような、例えば自分の持っている価値観などを題材にして話し合ってみると、お互い考えていることや大切にしていることが全く違うということに気づいていく。とはいえ、実習の際の彼らの様子を見ると、テーマに沿って話している時は、おそらく自己開示をしているという意識を持つほどでもないくらい、楽しくグループメンバーと話している感覚だったのではないかと想像する。そんな気持ちを楽しんだ対話を通して、彼らはメンバーと自分との違いに気づき、一人ひとりの『その人らしさ』を知っていったと考えられる。

この過程は、同時に、一人ひとりが『自分らしさ』や自分の強みに気づくことへもつながっていった。特に、それまで他者との違いを恐れ、自己開示を控えて過ごしてきた人にとっては、実習課題あるいは実習のふりかえりの時間は、半ば強制的に自分の気持ちや考えを伝えてみる機会となっていただろう。しかし、そこで自分を伝えてみたところ、むしろその違いに関心を示されたり、そういう自分を明確に肯定されるという体験が何度も生まれていったという。このような体験は、他者との違いを恐れる気持ちよりも、もっと自分を、そして相手のことを知りたいという思いを生み出し、別のメンバーとも対話を試みることにつながっていったと考えられる。

彼らにとって、このような反応やフィードバックを得る体験は、自分に自信を持ち、これから先も自分らしく生きていってよいという思いにつながったようだ。社会に出る前のこのタイミングで、他者との関わりを通してこのような思いを持てるようになったことは、きっと一人ひとりの今後の人生にとって、大きな支えとなるだろう。



この二年間のゼミを通して、自己理解が深まり、成長できたなど感じています。私はもともと人が好きで関心があったのですが、自分自身の行動や思考はどこか自分勝手でした。自分は周囲の人の状況や気持ちはある程度察することができると思っていましたし、それをふまえて自分に一番メリットのある選択を先回りして考え、面倒だと思うことを避けながら、勝手に判断して行動していた気がします。しかし、このゼミでの体験や分かち合いを通して、私がなんとなく想像しているよりも、周囲の人の状況や気持ちははるかに複雑で、様々な背景があるということを知りました。そこからさらに人に興味を持つようになり、「なんでこの子はそう思ったのか」「どんな価値観があるのか」など、自分と違うこと、その子の世界が知りたくて、言葉にしてコミュニケーションを取ることを重視するようになりました。すると、その子が大切にしている価値観が分かり、その子の良いところが分かり、その子が苦手そうなこと、得意そうなこと、喜びそうなことが分かるようになっていきました。それから少しずつ自分の価値観も変化し、「どうしたら全員が心地よいのか」という判断基準になり、チームワークや調和に重きを置くようになりました。(中略)

また、自分の気持ちや意見を言葉にすることの大切さを学びました。(中略) プライベートでも直観で話さずに、自分の気持ちが伝わるように、言葉を大切にしながら考えて話すようになりました。具体的には、丁寧な言葉遣いや単語選び、良いところを褒める事、感謝を伝えることです。前回の実習でも再認識しましたが、努力を知ってくれている人がいることは本当に励みになりますし、自分では当たり前だと思っていたことが誰かのためになっていることに気づくことができれば、さらに頑張ることができると思います。逆に自分の不安なことを肯定してもらえたり、認めてくれる人がいれば、自信もつきます。私が誰かのこのような部分に気づいても、伝えない限りは相手に伝わりません。伝えることで相手と良い関係を築くことができるかもしれないですし、巡り巡って自分や私の大切な人に還元されるかもしれません。対話の実習の中で、自己肯定感が高いと言ってもらえることがありましたが、それは皆の気持ちも引っ張り上げたいという思いがあったからそう見えていたのかなと思いますし、そんなふうに映ったなら嬉しいです。これを相手に押し付けたり、つつい干渉しすぎてしまうことがあるので、気をつけないといけないなとも思います。(最終レポートより)

この2年間は自分にとって深く、濃い時間だったと思います。今まで当たり前のようにしてきた、人と関わること、話すこと、聴くことに意識的に目を向けてそこから気づきを得て、よりよくしていくという、今後一生続けることが出来る学びを知り、体験することが出来ました。協力するこ

とや人と関わることはどんなことなのか、自分はどんな人間なのかについて目を向け続け、探求し続けてきた2年間でした。そしてこれはこれからもずっと続けていくものだと思っています。

ゼミに入るまでの自分は「自分は周りからどのように見られているか」をすごく気にする人間でした。嫌われたくなかったり、変だと思われまいようにと考えて自分の行動をとっていたので、人と関わることは得意ではなかったし、好きなものではありませんでした。特に初対面の人とは関わりづらく、自分に自信が持てないまま関わっていた自分がいました。今の自分は人と関わるのが得意になったかどうかはわからないけど、少なくとも人と関わることをポジティブに考えられるようになりました。自信については、持てている、いないというより、今の自分自身について「こんな自分も悪くないかな」と思っている感覚です。自分という人間に対してポジティブな見方が出来るようになってきたのかなと思います。(中略)

こうなれたのは、ゼミを通して関わってくれたゼミメンバーや、課外活動で関わってきた人達のおかげなんだろうなと感じています。ゼミメンバーからもらうフィードバックは、他者が自分のことをどう思っているのかについて気にしていたこともあって、一つ一つを大切に聴こうとしていました。メンバーからもらったものは本当にポジティブなものばかりで、一つ一つが自分の自信になっていった感じがしました。「聴き上手」や「責任感のある」、「しっかりしている」、「頼りになる」とたくさんのポジティブな言葉をもらいました。自分が当たり前のようにしていた行動が人からはポジティブに見てもらっていて、自分の行動が周りの人に良い影響を与えられていると思うと嬉しく感じていました。(中略)

こうやって、いろんな人からいろんなありがたい言葉をいただいて、今の自分があると思っていますし、自分もこれからフィードバックを通して人の良さを見つけられるようにしていきたいと思っています。自分の体験のように、当たり前と思っていることでも周りによい影響を与えている行動が日常でたくさんあるはずで、それを誰かがしていたりしたらそのことを伝えてみて気持ちを共有してみたいなと思います。そういう意味で自分に対しても、人に対しても厳しくありすぎないようにしたいと思いました。厳しく見てしまうと、何でもかんでも当たり前でして当然の行動のように感じてしまいそうなので、人の思いやりの気持ちを大切にしたいと思います。

改めて、この2年間は自分にとって大きな変化があって、その一つが「自分が自分をどう見ているか」という部分でした。コミュニケーションのトレーニングは、話すとか聴く力を伸ばすことがほとんどかと思っていましたが、前提として自分自身への捉え方が大切なんだと、表面上のコミュニケーションのノウハウだけを練習すればいいのではないということが分か

りました。自分自身のどういう思いや考えがその行動に至っているのか、プロセス部分に注目してトレーニングをすることが大切だと実感したし、それがすごく楽しく感じます。(最終レポートより)

こうして、ゼミの時間、あるいはそれ以外の時間でメンバーと対話を試み、相手から反応をもらう体験を繰り返したことによって、他者との関係の中で自分を開いてみることは怖いことではなく楽しさにつながることを実感できた彼らは、「もっと相手を知りたい」「もっと相手に自分を知ってほしい」という思いから、いつまでも対話を続けたくなくなっていたのではないだろうか。

#### 4-2-2. どのような自分であっても受け入れてもらえることを実感する

2020生は、ゼミ活動へ積極的に取り組むメンバーが多くいたが故に、積極的に参加することのできない自分を後ろめたく感じていたメンバーも生じてしまった。ゼミ活動に積極的に参加できなかった理由はそれぞれにあった訳だが、自ら進んで行動できない自分、ましてや、協力を求められてもそれに応えられない状況にあった人達は、どうしても積極的なメンバーに対して申し訳なさや後ろめたさを感じていた様子が伺われる。しかし、2020生達はこのような思いを放置せず、実習のわかちあいの機会を利用して、積極的な行動をしているメンバーへ自分の思いを伝えてみる事ができていたようだ。また、この自己開示に対して、「自分はやりたくてやっているのだからそんな風を感じることはないのでは？」と、さりげなく反応してもらったことが、自分の存在を間違いない受け入れてもらえている実感につながっていたものと思われる。このさりげない反応というのは、2020生達の一つの特徴であったとも感じる。人は、勇気を持って自己開示をした時ほど、相手の反応が気になるものであろう。その時に、ひどく驚かれたり不快な様子を示される訳ではなく、逆に強い励ましや慰めなどを伝えられることもなく、平静な反応を示されていたことが、「本当に今の自分でも受け入れられる」と実感することにつながっていたように思われる。

自己開示をされた側が平静な反応を返すことができたことには、後ろめたさを抱えたメンバーが、思いを放置せず、度々伝えていことも影響していたと考えられる。もし、自分の事情と思いを隠したまま過ごしていれば、周りのメンバーは「なぜ積極的に参加しないのだろうか？」という不審を募らせていったことだろう。しかしそうなる前に、積極的になれない側のメンバーも実習中やジャーナルの中で小さな自己開示をし、積極的な側のメンバーも何らかの反応をし、お互いの状態や気持ちを随時伝え合っていたことは、このメンバー達の特徴だった。このような小さな自己開示と受容の積み重ねが、どのような自分であっても大丈夫と思い合える関係を創っていったものと考えられる。

私はあまりメンバーに対して心を開けなかったなと思います。授業中のメンバーとの会話では、聞き手に回ることが多かったり、自分の話をするときもよく考えずに話をしてしまったと反省しています。しかし、中尾ゼミのメンバーは人を選ばずに、おとなしい自分に対しても、よく話をしてくれました。普段聞き手のメンバーでも、自分に対しては話し手になってくれたり、自分から話を振ったときはみんな親身になって答えてくれました。ゼミの雰囲気は、悪い意味での因果応報という言葉が全く似合わず、思いやりの多い雰囲気だったと思います。この雰囲気を作っていたのは、ゼミの活動を主としてやってきてくれたメンバー達だと思います。誰かがやらなければならないところで動いてくれた人たちがいて、その人たちが「やりたい人がやればいいよ」のスタンスでいてくれたおかげで、何事もなく過ごすことができました。しかし、ずっとその言葉に甘えて動かなかつたし、この反省は二年生からしています。最後の最後まで変わらずに本当に情けないですが、ごめんねとありがとうの気持ちをメンバーには伝えたいです。(最終レポートより)

また、誰のどのような発言に対しても、常に明るく温かな反応をするメンバーが複数いたことは、どのような自分であっても受け入れてもらえる実感に間違いなくつながっていただろう。自分の中にある気持ちや考えを思い切って伝えてみることを励ますような言動、相手に心から興味を持って笑顔で聴く姿が常にどこかにあったことは、ゼミ全体に安心安全の雰囲気を創り出してくれたと感じている。

相手に興味を持つという点では、メンバーとの関わりの中で気づきがありました。私はずっと、聞き上手になりたいと思っていたので、先回のプログラムで聞き上手に自分の名前を挙げてもらえてとても嬉しかったです。聞き上手に選んでもらえた理由として、みんなに興味があり、色々な話を興味を持って聞き、質問できたからかなと思います。また、それはみんなを好きになったからこそ、もっと知りたいと感じたのだろうと思います。つまり、コミュニケーションを円滑に行うためには相手に興味を持って質問したりすることが大切で、そのためには相手を好きになることが、自分にとってコミュニケーションを上手くしていくためのコツなのかなと考えました。みんなのことが好きになれたのは色々な活動を通して、みんなの考え方を知り、自分と違う考え方でその人の良さとして考えることができたからだと思います。今までの学生生活では自分と違う考え方の人がいたら、違うからあまり仲良くできないかも、と、違うという事実以上に踏み込んで考えることがありませんでしたが、中尾ゼミに入って、違う考えをする根本にはどんな理由があるのだろうと、その人の考えをより深

く知るための興味や考えを持つことができるようになりました。これはこのゼミに入った一番の収穫、学びであると思います。これからもコミュニケーションを楽しく円滑なものにするために、まずその人を知り、その人の考えの根本を知ること、その人自身を好きになっていけたら良いなと思います。(最終レポートより)

ゼミでは多くのメンバーと関わり、様々な活動に取り組む貴重な経験を行うことができました。そしてそれらの体験から、ゼミメンバーをはじめとした周囲の人物を助けられる人物になりたいと思えるきっかけが生まれました。私はゼミに入る以前は、人との関りが少なく、自分から積極的に人と関わりたいと考えるようなタイプではなかった。しかしながら、ラボラトリー学習や課外活動を経験したことで、同じ集団に属する仲間たちと共に苦勞を乗り越え、何かを成し遂げることの大切さや素晴らしさを知ることができた。(中略)ただ「人を助けたい」という考えを持つことの危険性についても同時に学ぶことができたと思われる。ゼミメンバーをはじめとした周囲の人物の助けになりたいと考えるようになった一方で、同時に人に嫌われたくないという思いが強まっていった。そして、他人の目を気にしすぎたが故に、自分から人に積極的に関わろうとせず、自分の殻に閉じこもって人との関わりを無意識に絶ってしまっていた時期があった。しかしながら、「まずは自分の考えや思いを相手に伝えることが大切」というアドバイスをもらったことを境に、他者からどう言われるだろう、なんて思われるだろうと気にするよりもまずは自身の考えをしっかりと相手に伝え、話してみることが大切であると気づくことができた。さらに、出会った当初から本音で語り合うことができた人たちに、この2年間で何度も助けられてきたことから、しっかりと話をしたうえで受け入れてくれる人との関係を大切にしていけることが、お互いに助けが必要な状況となった時に意味を成すのではないかと考えた。そのため、自分から殻に閉じこもらずにはまず相手と話をすること、そのうえで良好な関係を築ける人との関係性に目を向けることを大切に、今後につなげていきたい。(最終レポートより)

もし2020生達が、コロナ禍で閉じ込められることなく、通常の大学生活を送ることができていれば、こうした「お互いに違っていても受容し合う」体験は、大学生になって間もない頃から体験できていたのかもしれない。大学という場には、高校まで以上に多様な場から多様な背景を持った人が集まってくるため、世間話をするだけでもお互いの違いに驚くような体験が溢れていることだろう。しかし、コロナ禍の特殊な環境で過ごした2020生の場合、このような体験を、ゼミで出会ったメンバーと初めてしているような感覚を持ったメンバーもいたかもしれないと感じている。ラボラトリー方式の体験学習が、お互いの

違いを大切にしながら自己受容と他者受容をしていくことに貢献できたのであれば、本当に幸いだと思っている。

## 5. おわりに

2020生達とラボラトリー方式の体験学習のサイクルを脈々と繰り返してきた時間をふりかえり、そこから浮かんできたイメージは、メンバーそれぞれ中で、ジョハリの窓（Luft, 1999；柳原, 2005）の開放の領域が徐々に広がっていく光景だった。授業としてのゼミの中では実習課題やわかちあいの対話を通して、またジャーナルの記述を通して、毎回一人ひとりの小さな自己開示が繰り返され、彼らは自らの力で少しずつ開放の領域を広げていった。また、実習を共にした時の言動や本人の自己開示に対して生まれた気づきを伝え合うというやりとりを、丁寧に積み重ね続けた結果、それらのフィードバックが、本人の盲点の領域を減らし合うことにつながっていったものと考えられる。それらの一つひとつはささやかなものが大半だったのではないかと推測するが、2020生達の多くは、自分の、そして他者の開放の領域が広がっていく過程を面白いと感じ、徐々にその意味を実感していったように感じる。おそらく、ポジティブな気持ちでこの営みを積み重ねてきた体験があったから、関係の中で大きな葛藤が生まれた時にも、お互い逃げずに向き合い、可能な範囲で自分の思いを伝え、よりわかりあうための対話をし続けたのではないだろうか。

ハウ（1970）は、著書『対話の奇跡』の中で、

*対話は死んだ関係を回復させることができる。これはまさに対話の奇跡である。それは関係を新たに生み出し、死んでいた関係を再び生きかえらせることができるのである。*

*こういうことを可能にする対話の条件はただ一つ、すなわち対話は相互的であって、双方から出てこなければならず、双方が徹底的にこの原則を押し通さなければならない、ということである。一方が対話の言語を語っても、相手がこれを回避したり無視したりすることもある。その場合には対話の約束事は果たされない。対話的言語で話しかけること — すなわち対話に入っていくこと — は冒険である、しかし、両者がその冒険をする恐れを踏み越えるならば、対話のうちに隠された奇跡の力があきらかにされるであろう。(p9 1.4.11)*

と述べている。2020生達はきっとこの恐れを乗り越えながら、何人ものメンバーと冒険を繰り返してきたのだろう。筆者にとって、奇跡のように見えていた“あんなに対話し続けたい関係”は、2年間彼らが積み重ねた様々な努力により生まれたことを、今、実感している。

また、本稿を記述しながら、筆者がまだこのラボラトリー方式の体験学習に携わり始めたばかりの頃、諸先輩方が度々伝えてくださった言葉を改めて思い出していた。一週間のTグループの過程で、あるいは非常勤として期間の限られた授業に参加する中で、「急激な変化成長を望んではいけない」ということ、そして「メンバーそれぞれがこうなりたいと思う自分に徐々になれるよう支える」というメッセージを何度も受け取っていた。この2020生達は、溢れるエネルギーに任せて活発に動きながらも、体験学習のサイクルの中に身を置きながら、自分自身や他者との対話を細やかに積み重ね、結果として大きな変化・成長を遂げていった。学校という場は、共にいられる時間が必ず限られている。その中で、一人ひとりの確実な変化・成長を望んでしまうと、相手を操作することにつながりかねない。それぞれの思いを確認しながら、体験学習のサイクルを脈々と積み重ねることが、必ず一人ひとりの変化・成長につながっていくことを体現してくれた彼らのことを決して忘れず、この先出会う方々と共に、学びの場を創り上げていきたいと思う。

## 謝辞

ゼミの活動を共にし、豊かな学びの時間を創りあげてくださった南山大学経営学部中尾ゼミ2020生のみなさまに、心からの感謝を申し上げます。また、この研究のために、2年間記述し続けた貴重な記録をご提供くださったメンバーに、重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 参考文献・引用文献

- Howe, R.L. (1963) *The miracle of dialogue*. The Seabury Press. (R.L. ハウ、1970、『対話の奇跡 ヨルダン社』)
- Luft, J. (1999) *The Johari Window: A graphic model of awareness in interpersonal relations*. In Cook, A.L., Brazzel, M., et al (ed.) (1999) . *Reading Book for Human Relations Training, Eighth Edition*. (pp.51-54) . NTL Institute for Applied Behavioral Science.
- 中尾陽子. (2022) . コロナ禍のラボラトリー方式の体験学習 『人間関係研究』 第22号 pp.13-63 南山大学人間関係研究センター
- 津村俊充・星野欣星. (1996) . 出会いのころみ『Creative Human Relations II』プレスタイム pp.103-110
- 柳原 光. (2003) . 出会いの試み『復刻版Creative O.D. vol.3』プレスタイム pp.114-124
- 柳原 光. (2005) . ジョハリの窓－対人関係における気づきの図解式モデル－津村俊充・山口真人 (編)『人間関係トレーニング 第2版』ナカニシヤ出版 pp.62-65

## 参考URL

いりなか商店街発展会. (2021). いりなか探検！発見！おみせたんけん！ 最終閲覧日2024年8月29日 <https://irinaka.jp/edu/?fbclid=IwAR2bP38CvNn72u4qQkE11grs8JdDM0W4f1r4W576P8zK6313OmOJqLJfMco>

いりなか商店街発展会. (2022). いりなか探検！発見！ちいきたんけん！ 最終閲覧日2024年8月29日 <https://irinaka.jp/edu/?fbclid=IwAR2bP38CvNn72u4qQkE11grs8JdDM0W4f1r4W576P8zK6313OmOJqLJfMco>

認定NPO法人 全国子ども食堂支援センター・むすびえ (2022a) 全国40カ所の子ども食堂で、おもちゃの貸し出しを通した子どもとのつながりづくり新企画「おもちゃライブラリー」始動 最終閲覧日2024年9月10日 <https://musubie.org/news/5059/>

認定NPO法人 全国子ども食堂支援センター・むすびえ (2022b)

【ご報告】27都道府県42の子ども食堂に「おもちゃライブラリー」をお届けしました！最終閲覧日2024年9月10日 <https://musubie.org/news/5508/>

## 付記

本研究は南山大学研究倫理審査委員会における倫理審査を受け、2024年7月に承認されている。